

大学開設準備室段階で構想した基礎ゼミと今日

塩見義彦

キーワード： 総合ゼミ、専門職間バリア、連携教育、大学の使命

Basic seminar courses designed by the inauguration committee for university and the present status

Yoshihiko Shiomi

Keyword : Basic seminar course, Combined seminar course, Team medicine and collaboration,
University education, QOL.

第一章 はじめに

早いもので、本学が開学して6回目の秋を迎えた。そして今、総合ゼミを巡って様々な意見が交錯している現状を見て、本学開設準備室段階で構想した基礎ゼミⅠ・Ⅱ生成の背景と経緯及び現況に対する若干の見解を整理することもまた意味のあることかと考えここに報告する。

ご承知のとおり、1999年大学設立準備のための企画室が新潟市長潟の旧鳥屋野潟病院の一角に開設され、2000年4月には開設予定学科から1人ずつの教員予定者が専門委員という肩書きで集められた。そして各委員それぞれに個別のいくつかの検討課題が与えられ月2、3回の専門委員会が開かれた。基礎ゼミⅠ・Ⅱが具体的なテーマとして俎上に載ったのは第7回専門委員会からである。最初のうちは全員のディスカッション形式で進んでいたが、分科会再配分の際筆者に割り当てられた課題の一つが、「基礎ゼミⅠ・Ⅱの具体的内容を詰めるように」というものであった。

早速、着任早々に与えられた厚さ数センチもある“新潟医療福祉大学設置構想書”を紐解いた。講義内容の科目概要として、
「基礎ゼミⅠ： 大学とは何か。大学生はどのように学習するか。大学の使命、理念などを語り掛け、4年間で学

んでいく学科について理解を深めさせる。大学生活全般のオリエンテーションに始まり、これから何を学びどのような専門職になっていくのか方向を示して、動機付けを行う。」

「基礎ゼミⅡ： 大学における学習能力を身につけさせる。主に、参考文献・関係情報の活用方法など大学における基礎的学習の方法を指導する。」とある。

一方、大学設置の趣旨・必要性、大学の基本理念、さらには高橋学長から何度となく聞かされた新規開設大学に対する熱い思いを整理する必要がある。

第二章 大学設置の趣旨及び基本理念

超高齢化社会を迎えた今日「いかに長く生きるか」から、「いかに良く生きるか」が重要な課題となってきた。高齢者や障害のある人々のQOLを医療福祉の面から捉え、自分らしく生きることを支えることが求められる。そして、今そこに最も必要とされているのが、これまで連携を保つことが粗雑だった医療、福祉、保健の分野が連続性の中で連携し、チーム医療の体制をとって、対象者のケアにあたっていくことである。ただ、こうしたチーム医療に取り組もうとした場合、そこにバリアが存在するのは否定できないのが現状である。従って、時代が求めるチーム医療を学び訓練することは大学

新潟医療福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科

塩見義彦 新潟医療福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科

[連絡先] 〒950-3198 新潟県新潟市島見町 1398 番地
TEL・FAX : 025-257-4475
E-mail : shiomi@nuhw.ac.jp

教育の使命でもある。これら3つの分野を相互に理解し、協力体制をとりうる人材を育て、チーム医療を進展させ、クライアントのQOLを高めていくことが重要である。

この大学では、チーム医療の中核的存在となる人材をQOLサポーター（これは学長の造語であるが、実に言い得て妙である。）と呼び、これからの時代に求められるQOLサポーターの育成を図る。

また、チーム医療に欠かせない能力として、対象者はもちろん、連携する他専門職とのコミュニケーションを円滑にとることが求められている。そこには、クライアントの症状や要望を正確に捉え、その情報をチーム医療スタッフに適確に伝えるコミュニケーションスキルと、それぞれの立場や状況をくみ取り、柔軟な対応ができる豊かな人間性＝ヒューマニティが必要となる。その能力を身につけるために、小グループでひとつのテーマについてディスカッションするなどのカリキュラムを設定する必要がある。グループ内で情報を共有し、お互いの考えを尊重した上で、積極的な意見交換を行う。このことで、グループ内での情報の精度が高まり、自らのスキルも向上していく。その中で発揮されたチームワークこそが対象者のQOLを高めていく。これは、チーム医療の一連の流れを修得することにも繋がり極めて重要なことである。

以上が常日頃学長が口にしておられたことであり、文章としても書いている考えである。なお、基礎ゼミ、特に基礎ゼミⅡは学長のいわば建学の精神にも通じる思いが強く滲み出た教科であることを確認しておく必要がある。

次に大学の基本理念であるが、改めて言うまでもない事であるが、「QOLを支える人材を育成する大学」等の3項目である。そしてこのことについては、①医療福祉分野の高度専門職者を育成する。②医療福祉分野の諸専門領域を横断的、融合的に理解する人材を育成する。③対象者を全人的に理解し、支援する人材を育成する。そして有用で根拠あるサービスを展開するための根本的な理念は、対象者の「QOL向上」であると捉えることが最も重要であるとしている。さらに、教育内容の特色の中で、育成する人材像として、次のような事を挙げている。

- ア ClientのQOL（生活の質、生きる質、健康の質）を自ら考え、その向上を実践する人材
- イ 多様な価値観に寛容であり、対話ができる人材
- ウ 医療福祉分野の複数の職種の人たちとチームアプローチができる人材
- エ 教養的知識と専門的知識・技能をバランス良く身につけている人材

第三章 基礎ゼミ構想

以上の基本的理念等を踏まえて、基礎ゼミⅠ・Ⅱを次のように考えた。

1. 基礎ゼミⅠ・Ⅱの目的（教育目標）：

- 1) 大学とは何か。大学生生活全般のオリエンテーションに始まり、これから何を学びどのような専門職になっていくのか方向を示して、自らの動機付けを行う。（基礎ゼミⅠ）
- 2) 大学生として、また、地域で生活する大人としての基本的マナー、コミュニケーションスキル（日本語技法：読みかた、書き方、聞き方、話し方）及び、保健に関する知識（喫煙・アルコール問題、感染症問題）を身につけさせる。（基礎ゼミⅠ・Ⅱ）
- 3) 医療技術・社会福祉を学ぶ大学生としての高い倫理観や社会貢献の精神、豊かな人間性を身につけるなど全人格的成長をはかる。同時に、自ら学び、自ら考える力の育成をもとに、様々な角度から物事を見ることが出来る能力や、自主的・総合的に考え、的確に判断できる能力を身につけさせる。（基礎ゼミⅠ・Ⅱ）
- 4) 大学教育においては、とかく細分化した狭い分野に限定された知識の習得・研究に終始しがちであるが、基礎・基本を重視しつつ、他学科学生との積極的交流を図り、チーム医療に欠かせないグループメンバーとの相互理解によって目的を達成することの意義を学ばせる。（基礎ゼミⅡ）
- 5) 大学で何を学ぶのかを含め学習上の問題に悩んでいる学生への助言等、学生の入学から卒業までの過程における悩み・迷いの相談に応じ、最終的には、健康で充実した学生生活を送り、卒業後は自分の個性と能力を生かせる職業につけるように、担当教員・学生の人間的交流を図る。（基礎ゼミⅠ、Ⅱ）

2. 授業場所・時間

- 1) 授業内容・学生数より、教室は小部屋で、机の配置は口の字型が望ましい。従って、ゼミ室を前提に考えたが、新年度は36室を必要とするため一部研究室で対応せざるを得ない。
- 2) 時間を決め（例えば、週2回・各2時間程度）、学生との懇談の場として研究室を開放すること（「オフィスアワー」）は2年次学生のアドバイザーとしての機能を考え合わせると大切なことである。

3. 基礎ゼミ担当教員とグループ分け

基礎ゼミⅠ・Ⅱは原則、全専任教員が担当する。

- 1) 基礎ゼミの目的、性格を考えると1人の教員が担当する学生数は最大でも8人以下とする努力が必要である。従って、教員が不足する学科も出て

くる。その場合、学科長の出勤や他学科の応援等工夫が必要となる。

- 2) 基礎ゼミⅡは、5学科・男女混成 36 グループを作る。
- 3) 基礎ゼミの基本単位は小グループとするが、実際の運用に当たっては、小グループが 2～3 グループ合同の中グループ、或いは、学科単位、全学合同といった運用を必要に応じて機動的に行う。

4. 教科書及び参考書

- 1) 教科書等については特に指定しない。但し、「レポートの書き方・組み立て方」については全学統一のものを指定する。
- 2) 参考図書等は学生の経済的負担の軽減という意味から、その時々最新の新聞コラム、社説等で学生の興味、話題性に富むものを利用するか、図書館を利用するなどの配慮をしながら各担当教員が選定する。

5. 各回ごとの授業内容

各学科別にテーマ・授業内容を例示するが、全学合同等の授業以外は弾力的に運用してよいものとする。なお、具体的授業の方法、教員の役割、学生の役割等の細かな点については、各学科の特色を勘案して、各学科の専門委員が参考例となるべきものを作成する。

- 1) 基礎ゼミⅠ・Ⅱ共に、毎回授業終了後その内容についてレポート(400字以上1,200字以内)を作成し、提出させる。提出されたレポートは添削、意見を付して直接学生に返却する。
- 2) 基礎ゼミⅠの「課題について」は、他ゼミと合同で、病院・施設の見学や、親睦ツアー(事前に、了承を得る)などと振り替えてもよい。

次に、後期の基礎ゼミⅡの授業であるが、基礎ゼミⅠの学生とアドバイザーとの関係を維持・強化する必要から、5学科混成を基本とするが、アドバイザーミーティング日(基礎ゼミⅠの教員が前期に担当した学生グループと懇談する日)を一日設定する。

- 3) 基礎ゼミⅡは、基礎ゼミⅠのアドバイザー機能を維持する観点から、毎週のレポート添削は基礎ゼミⅠの担当教員が、前期に担当した学生のその後の様子確認も含めて引き続き担当する。(毎回学生は基礎ゼミⅠで指導を受けた教員にレポートを提出)

- 4) 基礎ゼミⅡ授業のテーマは、全学「共通課題」3テーマを毎年事前に決めておくものとする。各ゼミは、「共通課題」から1テーマを選び、講演(初回は学長、学部長講演)及び資料等を参考にして課題解決に向けて協議し、結論を導き、最終レポートを作成する。学科ごとに優秀作品1編を選定し

て第11、12回に全体会発表する。

- 5) 基礎ゼミⅡの担当教員は混成グループのコーディネーターとしてグループを指揮し、最後の発表会まで指導する。
- 6) 学長講演及び各学部長講演には、それぞれの立場で共通テーマに沿った内容の講演を依頼して検討会のガイドとする。
- 7) 基礎ゼミⅡ以降のレポートは、PC利用となることが予想されるが、必ず学生と顔を合わせる意味からeメールではなくFD等の提出とする。グループ発表会で発表した内容はホームページに掲示する。

6. 基礎ゼミⅡの共通課題テーマ

共通テーマ案として「“QOL”はどう在るべきか。」「障害」とは何か。」「自分にとって大学とは何か。」「安楽死～生きる権利・死ぬ権利～」「脳死と臓器移植」etc. が考えられる。

7. 成績評価

- 1) 基礎ゼミは高校のホームルーム的要素がある事、アドバイザーとして、また、少人数の学生間の人間的交流をその目的の一つとして掲げているという授業の特殊性や、その後の人間関係を考えれば、成績評価をすることの意味は相対的に薄い。
- 2) 出席日数、提出物の状況から“合”“否”判定するだけとする。(学則第32条の関係でA又はDとなる)
- 3) 合否判断において、欠席日数が1/3以上の場合は不合格とする。

8. 基礎ゼミ担当教員の役割等について

- 1) 入学後の履修相談をはじめ、諸々の悩みや疑問に対して相談にのり、健康で充実した4年間の大学生活を送らせるべくアドバイザー制を導入する。基礎ゼミⅠ担当教員が同時にアドバイザーとなる。
- 2) 今後の検討課題ではあるが、2年生も出来るだけ定期的に1年次の基礎ゼミⅠ担当教員のオフィスアワーに顔を出すよう指導して、1・2年生は基礎ゼミⅠの担当教員がアドバイザーの役割を担うことを検討してはどうか。
- 3) 基礎ゼミ担当教員は学生の一般的なレベルの相談にのり、適切なアドバイスに努めるが、重大な相談やノイローゼ等の精神的疾患が疑われるような場合は専門の学生相談室へつなげる。
- 4) 学科長、学部長さらには学長への報告様式を整備、(必要によっては、事務部門も含む)決裁、報告のシステムを作ることにより、問題のある学生の状況が常的に確かかつ迅速に関係者に伝わり問題を共有しうるシステムを整備しておく。このこ

とは同時に問題学生の担当教員だけが一方的に責めを負うことがなくなり、かつ問題の解決を早めることにつながる。

5) 基礎ゼミ担当の主任、副主任の問題についてはなお検討を要すが、教員 A と B がペアを組み、2つのグループを、お互いが主任、副主任として担当する。

9. その他

1) ゼミそのもののあり方について開学後速やかに検封委員会を発足、充実強化策を検討するものとする。

2) マスコミでもしばしば話題となっているように、今後の大学運営を考えると、基礎ゼミの持つ意味は益々大きくなっていくように思われる。基礎ゼミの内容を4年間の大学授業の中でどう位置付けていくのか改めて検討する必要がある。

第四章 まとめ

以上が準備室段階で構想した基礎ゼミの概要である。なお、文部省提出の設置構想書の基礎ゼミⅡの説明では、5学科混成グループの発想は読みとれない。しかし、この「5学科学生をシャッフルしてゼミを行う」は学長の当初からの発想でありブレはない。「チーム医療に取り組もうとした場合、そこにバリアが存在する」とか、「育成する人材像」の「イ、多様な価値観に寛容であり、対話ができる人材。ウ、医療福祉分野の複数の職種の人たちとチームアプローチができる人材。」といった基本的考えを踏まえた教育方法として、それは当然の帰結であったとも言える。

基礎ゼミⅠ・Ⅱは数ある授業科目の一つではあるが、しかし、この科目には本大学基本理念の具現化の第一歩としての思いがぎっしりと詰まったものであると言える。毎回のレポートは整理して書く、考える、文章力を身につけさせる。そして、それを担当のアドバイザーに提出する。そうすることによって最低週一回はコミュニケーションの時間をとることが出来る。また、アドバイザーミーティングデイも今はなくなっているが、現状は忙しいこともあってその後の状況は殆ど把握していないのが実態である。学生とアドバイザーの人間的絆がより深まれば、昨今の中途退学者の数を少しでも減少させることが出来るかもしれない。アドバイザー制をこの大学に根付かせたいとする思い、異職種間の抵抗感を少しでも少なくしたいという思い、コミュニケーションスキルを少しでも身につけさせたいとする思い等々、基礎ゼミには特別の思いが込められ、大学の基本理念はこの基礎ゼミⅡにこそ在るといえ、本学の特色でもある。

当初構想したことには様々な思いがこめられている。今となっては教員も多忙を極めているためレポートを毎

回添削して返却という事は現実問題無理である。開学の早い時点で「提出レポートを話題にアドバイザーと学生のコミュニケーションを図る」と修正すべきであったと考えている。

成績評価の点についても現実は大きく変更されているが、準備段階の考え方は前記の通りである。ただ、教育活動をして、その過程なり成果の評価が“合”“否”に固定されることに対する不満は理解できる。例えば、グループ活動にも積極的に参加しない、できない学生もいる。そうした学生にも A 評価しなければならないもどかしさは有るとは思われる。しかし、自らの指導力あるいは評価基準を絶対と考え、B、D 評価をすることの意義がどれ程有るのかも疑問の残るところである。参加できない、参加しない学生をも活動に参加させる努力をして、7学科学生が協力して一つのテーマについて検討することがこの授業の趣旨でもあることを考え合わせるとその評価は難しい。もしかすると B 評価したがる私が B 評価なのではないかとさえ考える。

以上が開設準備室段階における基礎ゼミ論議要点と所見である。今、4年生対象に実施が検討されている「総合ゼミ」についても、いわば基礎ゼミⅠ・Ⅱの延長線上に位置するもので、むしろ開学前から検討され実施に移されているべき内容のものであったと考えている。私どもの対象とするクライアントは一人の人間である。一人の生きた人間をそれぞれの立場から光を当て、そのQOLの向上を考えている。そうしたことを考えると、本来ならば、四年間を通じて、学科間シャッフルの授業を1コマ設けて専門職種間の垣根を取り払う努力、協力し合う努力を学ぶ場があって然るべきでないかと考える今日この頃である。